総　務　常　任　委　員　会　記　録

令和８年２月５日（木）午後１時30分～午後４時10分（第１委員会室）

○出席委員（９名）

委 員 長	沢井　和宏
副委員長	石山　波恵
委　　員	三浦由美子
委　　員	鈴木　　哲
委　　員	後藤　善次
委　　員	鈴木　正実
委　　員	村山　国子
委　　員	宍戸　一照
委　　員	半沢　正典

○欠席委員（なし）

○市長等部局出席者（なし）

○案　　件

所管事務調査「市民が安心して過ごせる避難所に関する調査」

１　参考人招致

２　参考人招致に対する意見開陳について

３　行政視察に対する意見開陳について

４　その他

午後１時30分　　開　　議

（沢井和宏委員長）ただいまから総務常任委員会を開会いたします。

まず、参考人招致を議題といたします。

初めに、資料、参考人招致実施要領をお開きください。本日は、市民が安心して過ごせる避難所に関する調査の一環といたしまして、この後、１時40分から福島大学行政政策学類地域社会と文化コース教授の鈴木典夫様を参考人として迎え、東日本大震災時の福島大学避難所での体験について、そし

て避難所の在り方に対する見解について、他団体との連携についての３点についてお話をいただくこととしております。45分ほど意見開陳をいただいた後、質疑を45分ほど行うこととなっておりますので、よろしくお願いします。

改めての確認となりますが、本日の留意事項につきまして、参考人招致実施要領の２ページ、９、各委員に対する注意事項をご覧いただきたいと思います。その四角囲みにあるところでありますが、①、参考人はあらかじめ依頼した事項について意見を準備して出席しています。そのため、依頼した件以外の事項について意見を求めた場合、委員長は委員の発言を制止することができますので、ご了承願います。

次に、②、参考人招致は証人と異なり、委員から依頼して出席を求めるものですので、参考人に対して礼節を尽くし、追及するような質問をしないでいただきたいと思います。

③、スムーズな議事進行にご協力をお願いします。

それでは、参考人招致開始まで暫時休憩をいたします。

午後１時32分　　休　　憩

午後１時35分　　再　　開

（沢井和宏委員長）総務常任委員会を再開いたします。

本日の委員会は、市民が安心して過ごせる避難所に関する調査の一環として参考人の方にご意見を伺うため、福島大学行政政策学類より、教授の鈴木典夫様にご出席をいただいております。

鈴木様におかれましては、本当に大変お忙しい中、本委員会のためにご出席いただきまして、誠にありがとうございます。委員会を代表しまして心から御礼申し上げたいと思います。先生のこれまでやってきた経験に基づいた実践例等、忌憚ないご意見をお聞かせいただければと思っております。どうぞよろしくお願いを申し上げます。

本日の会議の進め方でありますが、最初の45分で鈴木様から事前に依頼していた項目に関してご説明、ご意見をお述べいただき、その後の45分で質疑応答という形で進めてまいります。

それでは、早速ご説明、ご意見をお願いしたいと思います。参考人の方のご発言をお願いします。着席のままお話しいただければと思います。

（鈴木典夫参考人）本日はこういう席にお招きいただきまして、お話の機会いただきまして、ありがとうございます。私、今回市民が安心して過ごせる避難所の在り方についてということで、委員長の話にありましたけれども、今日は私の経験に基づくような話が中心になるかと思います。

改めまして、福島大学行政政策学類の鈴木と申します。よろしくお願いします。私、学類としての教務にも就いていますけれども、福島大学では産官学連携、イノベーション人材育成と復興創生という形で大学としての担当する部局があります。地域未来デザインセンターのセンター長も仰せつかって業務に当たっております。

それでは、早速ですけれども、本日は避難所といったところに焦点を当てたお話でありますので、まさに2011年の３月11日、東日本大震災の際には福島大学が国立大学としては戦後初めて避難所を開設するというような、そういう経験を持つに至りました。冒頭に申し上げますが、旧態依然とする避難所といいますと、皆さん示さなくても何となくイメージが頭に出てくるかと思いますけれども、避難所は決して我慢するところではないと。さらに、少し突っ込んだ話をすると、憲法第25条の健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有するというような生存権というようなことを言ったときに、避難所で過ごす数日間あるいは長期にわたっては数か月間、健康で文化的なという、決してこれは貨幣的な価値での最低限ではなく、生きていくという意味での権利を消滅する期間ではないと、むしろそういったときだからこそ生きていくという形の権利をきちっと保障していくというような考えに立たなければいけないのではないかなというふうに考えているところです。

そんなところから福島大学でありますけれども、福島大学は電気が幸いなことに使用ができました。しかし、ガスは１か月以上使えなくなったということで、生協等々の煮炊きというような食事をケアするような施設は使えないというような状況でした。上下水道についても、これも幸いなことに約10日前に開通したので、何とかインフラというところではぎりぎり保ってたというようなところがあるかと思います。

３月16日に避難所が開設されるわけですけれども、通常でしたらば直ちに避難所というのは開設され、指定されているところについては指示があって運営をしていくところですけれども、そもそも福島大学は、こういった甚大災害等々での避難所という形では市の施設、県の施設で、国の施設というのほとんどは指定されていないという状況でありましたので、例外的に関東大震災のとき東京大学が避難所として開設されたという歴史はありますけれども、いわゆる原発事故に由来する浜通りからの避難された方々を福島市として受け入れていくときにもう容量が満杯になったということで、県のほうから直接福島大学も避難所としてお願いできないかと、任意ということでなく、指定をさせていただくので、直ちにお願いできないかというようなことで開設に至ったという経過があります。福島大学としては、その県からの連絡がありましたら直ちに、私のところにも大学事務局のほうから連絡をいただいたところでは、すぐさま間髪入れずやりますというような返事をして準備が始まったというところでありました。

大学としての体制は、地域連携担当副学長が避難所のトップになりまして、職員の中で避難住民対応班というような地域連携課、研究振興課、学術情報課、図書館の職員なのですけれども、15人の課員をもって避難所運営に当たりました。私がたまたま阪神・淡路大震災でも避難所の運営の経験もありますし、中越地震、中越沖地震のときも避難所のサポートをしていたということもありましたので、アドバイザーという形で、ただ実質上現場を仕切るというような形で協力をさせていただいた。しかし、最大の福島大学としての特色、強みであったのは、学生たちの協力を得て運営に当たったというところであります。もちろんほかの学習センターだったら学習センターの職員さんだったり、学校で

あれば教職員の方々が一丸となって避難所運営をされていたと思いますけれども、福島大学も教職員だけではなくて学生も含めて運営に当たったというのが一つの特色になったのではないかなというふうに思います。ただ、この避難所のボランティアを学生にお願いするというのも、後で少し触れるところでありますけれども、全学的に自宅に待機をしなさいというのが大学からの連絡でありましたので、大学に残っていたというのは家族が行方不明な状態であったりとか、津波被害で家に戻れなくなっているという学生だったりとか、あるいは原発避難で帰宅不能というような学生たちが実を言うと残っていたわけです。その彼らに対して少し気を落ち込むことなく、もしできるのだったら、避難所も開設されるので、運営を手伝っていただけないかというような声かけをしたというのが実を言うと学生にお願いしたという事情です。もちろん彼らの生活を守るというような、これを先んじて言ってしまっているところがあるかもしれませんけれども、避難所としてそこを利用される方々だけではなくて、近隣の方々の生活の支援に当たる拠点だというのが避難所の考え方だというふうに思っています。ましてや福島大学でしたらそういった学生を守るという、そういった役割を強く帯びていたのかなというふうに思っています。しかし、彼らが非常に存外に活躍をして、最後、避難所が４月30日閉鎖されるまで、その中で一人一人避難所を退所されていくときに、いみじくもここの避難所は日本一の避難所だというふうに言った方が、同じフレーズ別々に、示し合わせたわけではないのですけれども、２人の方が同じことを言いました。それは学生たちの非常に献身的な付き合い方があったのではないかなというふうに思っています。

皆さん方のタブレットにも写真幾つか紹介していますけれども、基本的には温かいものしか出さないという考え方でやっていました。初日から３月16日は受付をしながら、17日にはもう既に温かい食事しか提供していません。それは徹底して冷たいものは出さないという、そういうことをやっています。左上のほうは、こたつを用意して、あらかじめ団らんが取れるようなスペースを設定していました。そのほかにも広域、双葉12市町村全ての方々が、後発だったものですから、混在するような避難の方々がいらっしゃいましたので、原発事故ということもあって、各市町村からの連絡事項等々もあるだろうというようなことで、大広間をつくって、そこで県の担当者、市町村担当者からの連絡情報が行き届くような、全員で集まれるような、そういう集会スペースもつくったりとかというような避難所にしていました。

具体的にご紹介という、私の思い出話になるかもしれませんけれども、避難所はもともとユニバーサルな存在であります。妊産婦の方もいらっしゃいますし、ご高齢の方もいます。その中で福島大学のほうでも要介護２の方もいらっしゃいました。服薬管理をしなければいけない方もいましたし、精神的なところで疾患を持って、対人関係に不安を持っている方もいらっしゃいました。妊産婦の方もいました。ゼロ歳児もいました。学齢前、小学生、中学生、高校生、そういった方々いるという中で、もともとユニバーサルな存在、集合体でありますので、これは一つ一つの工夫というよりは、ユニバーサルな存在だという前提を考えたときにどういうふうに工夫をするかというのがそもそも始まりだ

というふうに考えなければならないというふうには思っていました。

その中で福島大学の避難所で心がけたところは、当初より日常生活をとにかく平生を保つようなことを、平生を取り戻すような形で避難をされてきた方を受け入れようと、こういうような形は学生と示し合わすような形で話をしました。その中で言ったら、起床の時間をつくり、そして必ず離床すると。よくありがちなのが、配給型の食事を家族単位で取りに行ったときに、自分のスペースのところに持ち帰って食べる。結果的にそれが長期になると御飯粒が落ちたり、汁をこぼしたり、そういう形で衛生上も問題になってくるということもあって、寝食分離という形でそれは行いました。福島大学、ご存じの方もいるかと思いますけれども、体育館とサークルの合宿所と、体育館２か所あるのですけれども、そこを提供したという形になりますが、生協が大学会館という学生たちが通常に食事を取るところが体育館と別なところにありますので、必ず離床して、着替えをして、そして食事をするところに歩くと、これも意図的に歩いていただこうということで寝食分離という形をさせてもらっています。

そして、配給食はありましたけれども、それを温かいものに作り直して、完全自炊型で47日間かたくなに通し続けました。それが学生たちの調理だったりとか、あるいは近隣のお弁当屋さんに米だけは炊いてほしいというような形をお願いして、実を言うと近隣の方々にお願いしたという部分は１つだけではありません。入浴、水は出ましたけれども、ガスが全壊でしたので、温水は出ません。若い方は我慢して冷たいシャワーを浴びていましたけれども、ゼロ歳の赤ちゃんがいるお母さんは大変で、だっこしながらもお風呂に入りたいということで、近隣の松川地区の方々にお呼びかけをしたら、うちのお風呂を使っていいですよという方が数軒見えましたので、ゼロ歳児の子供さんについてはお母さんと一緒に週に決めた曜日に地域の方にお風呂を提供していただくというようなことも工夫をしながら入浴なんていうこともありました。

加えて、土湯温泉のほうの旅館にバスを出していただいて、４月にかかろうというときでありましたけれども、そういう温泉バスを回していただいて入浴をする。ただ、そのときは福島大学だけではもったいないですから、近隣の小学校の避難所であったりとか、体育館の避難所であったりというところにバスの循環をつくりまして、週に２回ほど入浴をするというような、こういうのも一つの資源活用といいますか、使えないというのだったら使えないままの放置はしないというようなことです。洗濯、買物等々についてもツアーを出したりということで行っていました。

物資については、配給型とマーケット型ということで、マーケット型というのがその当時は非常に珍しいやり方だったと思います。今能登とか等々見ると、こういうマーケット型結構多くなっているのですけれども、いわゆる200人の避難される方がいて、70個ぐらいの物資しかない。そういったときには、それは配れないというような考えで運営する方も多くいらっしゃったのです。結果的には、そういうものがたまっていくと、不要な支援物資になってしまう。でも、不要ではないのです。ありがたく預かったというものもありますし、そういったときには、配給型になると、数がそろわないとと

いうような形の一つの考え方によっていたかと思います、まだ。でも、本来だったらば日常生活にスーパーマーケットに籠を抱えて、必要なものだけを入れて、それを消費するという、これも日常行動だというふうに思えば、Ｔシャツ、トレーナー、下着あるいは子供さん向けのお菓子だったりとか、日用品の石けん、タオル云々というのは必要な方が必要なところ、お店に行くような形で取っていく。そうすると物の取り合いにならないのです。非常に整然とした物資の活用になると。

ほかの避難所等々も同じ時期に巡ることもありましたけれども、何か支援物資が入りました、これから皆さんに配給しますというふうなアナウンスが流れますと、一目散に駆けつけて、それで物すごいカオスの状態になってしまうということがよくあります。そして、本当だったら不要なものまで欲しがってしまいます。男性なのに女性用の洋服を手に取って、結果的にそれが避難している布団スペースに山積みになっていって、余計にどんどん、どんどん自分のスペースを減らしていくという、これもあまり中期にわたって場所を提供するという意味では不要な物資を不用意に配給するという方法は考え物と。要るもの、要らないもののコントロールは家族でしてください。お菓子なんていうふうに並んでしまうと、子供たちがいっぱい食べたくなります。お母さんが取り過ぎだよと、そんなお菓子ばっかり食べないでというのは私たち避難所の運営する側がコントロールするものではなくて、家族のほう、お母さんのほうから言ってあげてくださいというような、そういう会話を交わした記憶もあります。

福大避難所で考えた人権を考えるというのは、これはあらかじめです。最初からです。プライベートな空間を確保するのは、スペースの間仕切りは当たり前なように設置をしました。ですから、学生に一番初めに指示をしたのは、とにかく不要な段ボールをスーパーマーケットであったりとか、大型量販店に行ってかき集めてこいというところから始まったのですけれども、後々はこれも段ボールを製造している会社のほうに平板の段ボールを大量に寄贈していただきまして、ちょっとここにあるようなあらかじめの空間をつくって、避難所が16日に決まったときに、どこにどういうものを設置して、どういう空間を居室にして、身体が不自由な方はどこのスペースを使ってというような形をあらかじめ設計をしました。短時間でしたけれども。ここは通路にするので、通路には人は入れないでくれと。言ってみたらこれは住宅政策の応用みたいなもの、都市計画の応用、超ミニ版みたいな形をあらかじめしました。ここはもう既にこたつとテレビを置く場所だから、ここには人を入れないでくれというような形で、Ａブロック、Ｂブロック、Ｃブロック、Ｄブロックという形で８畳のスペースと３畳のスペース、８畳のスペースは４人まで、３畳のスペースには１人か２人、それより大人数のご家族については１つのブースを２つ利用していただくとかという形で、そこも整然と利用することができて、荷物の整理整頓もできると。こういったプライベートな空間を確保するのは当たり前の話です。この15年たつ中で、こういったところについては、もう既に間仕切りのパーティションであったりとかも用意されるというところがほとんどですので、これは一つの進化をしている。あるいは、もうそのパーティションさえもという形で、テントですね、そういうテントを利用して即席に作るという。ただ、

テントも暗いのです。能登に行ったときもそうでした。学生たちと一緒になって能登の避難所にも手伝いに行きましたけれども、窓を作るという、ナイフでがちゃがちゃと四角に切って、天井にもちょっと切り目を入れて光を入れるというような形をしないと、真っ暗なので、そういったところにはまだまだこれは皆さんが気づく上でのプライベートな空間を確保するということは工夫されているのかと思いますけれども、これは当たり前です。我慢をしろという話ではないのですから。

女性の空間をつくる、これは阪神・淡路のときから言われて、中越も言われ、中越沖も言われ、その間ほかの震災のときも言われ、能登でも言われ、これだけ言われているのに、あらかじめ分かっているのだったら、女性の空間から先につくれよというふうに私は思います。とにかく分かっていることです、これは。当たり前です。着替え、授乳、物干し、おしゃべりをする空間。もう一つは、福大の場合は女性の空間をつくるのだったら男性の空間もつくりました。これも当たり前です。中学生、高校生の男の子はやっぱり恥ずかしいです。男性は男性だけで少しおしゃべりの機会をつくるという、やっぱり空間がある。女性だけあって、男性がというふうに言いかねません。これは一緒です。

そのほかに居場所を考えるということで、乳幼児の、ゼロ歳児、３歳までの子供さんの家庭は合宿所の畳場のほうということにしましたし、要介護状態の方々についてはベッドを作りました。酒屋さんに行ってビールケースを借りてきて、即席のベッドを作って、介護ができるような形にしたりとか、障害のある方については、私が福祉を専門としていますものですから、学生のほうに助言をしながら、対人関係が非常に苦手な方だったり、夜徘回してしまったりとか、奇声を上げたりとかという話については、とにかく落ち着くような環境をつくるということで、何かケアをする必要はないけれども、何かがあったら教えてくれというような形で、学生とかなりの時間を一緒にするような時間を取らせてもらったというような、これは一つの工夫だったかもしれません。

あと、コミュニティーをつくるという形で、これは最初からではなかったのですけれども、団らんのスペースは最初からつくるというのは意図されましたけれども、大広間とかミーティングスペースをつくったりとか、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄというふうにブロックをつくりましたので、各ブロックのところに自治会というか、班長さんの人をつくりました。お願いしますという形。福島大学の避難所の中で自治会といったものをつくって、私たち運営する大学教職員、学生と避難している方々との話合いだったりとか、こちらのほうから伝えたいこととかという形は、自治会長さんという形をつくって、避難している方々の一つの住民組織としてブロックの人たちに伝えていただいたりとか、あしたこういう相談事がありますよというのを掲示だけではなく口伝えでちゃんと伝えていただいたりとかということで自治会長さんをつくりました。そんなところからそこに避難している方々が少し体を動かしたいとか、みんなで楽しいイベントやりたいとか、学生さんの卒業式をやってやりたいとか、そういう話があって、ありがとうございますということもたくさんありましたけれども、住民の方々の申入れでそんなイベントをやったりとかもしていました。

さらに、役割をつくるということも心がけていました。食事も自炊で温かいものを作るということ

でしたけれども、Ａブロック、Ｂブロックという形でお手伝いできる人は日替わりで一緒に食事を作りましょうということで、お母さんたちに手伝ってもらったりとか、中にはいろんな職業で調理師さんをやっていたとか、福祉施設で管理栄養士をやっていたとか、やっぱり地域の人たちってそういうマンパワー、資源がいっぱいあります。リソースがあります。そういう人たちがずっと布団の上に座りっ放しというのは、そういうことを避難所は提供しているわけではないのです。その方々にも何か動きたい、何かお役に立ちたい、もしかしたら気持ちの上で何か気を紛らわせてあげるということも含めて、一緒に御飯を作りましょう。男性の方には、ふだんだったらこの時間は働いている時間なのだよねというところもあるのであれば、福島大学図書館、十何万冊雪崩を打ちましたから、すみません、皆さん方、図書館のほうに出勤していただけないでしょうかという形で、それで避難している方々、図書館の方々の指示で、５月12日に福島大学は再開しましたけれども、そのときには見事に図書館は全て棚に蔵書が収まりました。避難された方々のおかげです。こればかりは本当に避難された方々のおかげなのです。１年かかったという図書館もある中において１か月間で終わったのです。こういうような役割をつくるということも一つの避難所としての創造性だと思います。

大事なのはやっぱり健康維持でありますので、食事のバランスは必ず野菜を入れていました。福島大学の避難所は、食材が非常に潤沢にありました。もう数日の間に野菜を仕入れるルートをつくりました。たんぱく質の食材を食するようなルートもつくりました。そこら辺は中越地震とか中越沖地震で関わっていた人たちが応援してくれたというのが正直なところなのですけれども、いっぱいお魚もお肉も次々と送られてきたので、食事のバランスは非常に気にかけてちゃんと提供していました。こういったところは、避難所の運営いかんによって後々の関連死を起こすかどうか、これはかなり大きな影響を与えると思います。避難所の１か月か２か月、あづまだったらば９月まで、ビッグパレットだったら10月まで、その間に健康を害してという方々がたくさんいらっしゃったということを考えれば、40日間も長いです。でも、その後のことを考えると、避難所という部分については関連死を起こさない一番初めの入り口ということをやっぱり強く意識しなければならないというふうに思っています。その上で食事、配給御飯だけでいいのだろうかという話はいろんなケースを見ていかなければならないのだろうというふうに思っています。

たまたま福島大学に保健センターがありますので、お医者さんもいます。看護師さんもいます。ということで、校医と相談員の方々、あとメンタルヘルスの相談員の方もいらっしゃいますので、そういった方々も協力をしていただくという形にしておりました。

何よりも学生ですよね。学生たちは意図的に避難している人たちと会話するようなしむけ方をしていました。中にはボランティアもその居住空間には入らないでというふうな避難所運営するところあります。お手伝いする人は支援物資の仕分という形だけで、居住空間には一切入らないでくださいというような運営されるところもありました。私は、これはやっぱりメンタルヘルスの問題だったりとか、日常性をつくるとか、あるいはそこで被災した人と支援する人ということを二分するという意味

でも、そこはやっぱり考え物だと、ユニバーサルなのですから、もともと。という話を考えたときに、あえて学生たちはいろんな人とおしゃべりしてごらん、子供たちもたくさんいる、お母さんたちともしゃべる、これが日常だということで、非常に積極的な関与をさせてもらって、健康といったものに努めていったというふうに思います。

そのほか課題ということでは、子供のスペースをつくったりとか、受験生もいました。受験生もいて、やっぱり勉強の遅れが非常に気になるということで、勉強の部屋つくってほしいということで、勉強の部屋もこれもあらかじめ予定していたところでつくりました。４月になって、金谷川小学校のほうに一時的な転校をするわけですけれども、まだ給食がないということで、お弁当を作っていかなければいけないのです。そうすると、避難所から行くと、ヤマザキのパンを持たせて毎日行くわけです。お母さんたちそこが物すごく悲しいと。自分の子供たちに私のお弁当を持たせてあげることができない。これは課題なのです。これは非常に個別的ケースかもしれませんけれども、そういうことを思ったときに、ではお母さんたちが自分の子供さんにだけ作れるキッチンをつくりましょうということで、また別な部屋を、空間をつくって、そこに冷蔵庫とフライパン、いわゆる熱源を持った調理ができるような、電子レンジを置いて、自分の子供だけの卵焼きを焼く、ウインナーを添える、持たせて、行っていらっしゃいと送り出す、こういうような形も課題をこなすというような。そういったときにはやっぱり運営者としてのマネジメントといったものが非常に重要になってくるのかなというふうに思います。

そのほか、避難所運営マニュアルにも載っていないことでは、ロッカーを作ったのです。先ほど言いましたように、ちょっとブースのような空間をつくらないで、雑魚寝のような形で寝ていますと、物がたまってたまって、境界を分けて崩れていったりとか、そういう形で隣の人といざこざが起こってけんかになったりとか、そういったものがあって、不要なものというのがその空間にあふれたりするというときには、ロッカーというふうに称して各世帯にカラーボックスを１つずつ手配しておきました。そうすると、小学校に通うランドセルここに置きます。自分たちの空間は置かないです。洗面道具はここの中に入れます。自分のところの空間に持って帰らないです。そうすると広く使えます。普通の家になってきます。外履きはここに入れます。なんていう使い方はいろいろありますけれども、おむつ等々はここに入れておきますとか、という形は、かなりこれは有効なものです。避難所のスタンダードでスフィア基準というものがありますけれども、イタリアのほうで作成されて、これは世界スタンダードです。スフィア基準にもしっかりとこういう、内外においての収納スペースをつくるという項目が入っています。ちょっと福島市はなかったかなと、見落としかもしれませんけれども、意外とこれは非常に役立つということです。

それと、避難者カード、こちらのほうもきちんと作っていただきました。これはとってもいいです。それをどういうふうに使うかということがあるのですけれども、東日本の場合はこの点においてかなり後退しました。浜通りのほうから12万人の方々がふるさとを離れて避難しているときに、どこに誰

が行ったか全く、皆目見当がつかない。避難所という避難所にべたべた、べたべたっと無秩序に貼り紙を貼っています。体育館の壁一面ぐらい、外壁一面に貼っています。１か所誰々どこにいるのだろうというふうに捜すのに２時間ぐらいかかってしまいます。避難カードは、私たちもこれは最初に事務の方にもお願いしたのですけれども、絶対一人でも欠けないように名前を、受付時間かかってもいいですから、全ての人の連絡先とお名前と全部やってください。こちらあるように、住所までは詳しく言いません。何々町どこそこの誰々さんという形で名簿を全部貼り出しました。そうすると、いるかいないかということが福大の避難所にたくさん来ていました。もちろん訪ねてこられる、声かけてくれる人もいますけれども、こちらにいらっしゃいますかというふうに見て、いませんというふうになったらば、ものの１分で別なところに移動していきます。中越地震も中越沖地震もそういう形がなされていました。阪神・淡路はなされていませんでした。東日本も元に戻ってしまったというふうに私は印象として受けました。こればかりはしっかりやったほうがいいです。後々の本当に役に立ちます。避難者カードをどういうふうに取り扱うという問題かと思います。

それと、災害対策本部のところに物資がたくさん集まってきましたけれども、なかなか人手がないと物流が止まります。福島大学については、研究者のネットワークってやっぱり大きいのです。何々学会とか、何々研究会とか、私も社会福祉関係の地域福祉学会だったりとか、全国のボランティアセンターとか、ボランティア協会、福島大学に物資を預けたいというのはたくさんありました。それも第二体育館結局使わなかったので、第二体育館全面に物資がたまりましたけれども、福島大学避難物資の仕分マニュアルというの実を言うとつくっていました。おむつでもパンツ型なのか、テープ型なのか、布型なのか、Ｓ、Ｍ、Ｌ、そしてパンパースなのか何なのか、メーカーもあります。高齢者用もあります。おむつ１つだけでも三十数種類も挙げられます。という形をマニュアル化していましたので、学生たちにそれどおりにやって、一つのセットを作ってもらったと。それをほかの避難所に不足していれば搬送するということも福島大学でやらせてもらいました。これは福島大学だけが専売でやる必要はないと思います。効果的な物流をどういうふうに考えるかというのは、これも絶えず考えなければいけないというようなところかなと思います。

時間も10分ぐらいになってきましたけれども、大学としてというメリットで、あるいは避難所のときに、大学というような能力というか、力量を使うといったときに、やっぱり専門的な関わりができるということは大きかったのです。健康面ではお医者さんがいましたし、栄養面では栄養学の先生います。家庭科教育の先生がいます。幼児対応、幼児教育の先生います。造形教室としての美術系の先生がいます。ストレスケア、心理学の先生います。女性の問題をやっている先生もいます。法制度、行政手続きの専門家います。雇用の問題について、仕事をなくしたという、そういう雇用の面での不安だったりの相談も受け止める。情報処理の環境をつくる先生もいますし、私も福祉対応はさせてもらいましたし、要介護２の方については福大単独で松川かいわいの福祉事業者のところで独自のケアチームをつくって、直ちにケース検討をやって、福島大学の避難所からショートステイに行くとか、

福大避難所からデイサービスに行くというようなことを直ちにやっています。こういった形は関わっていけます。何か必要とあれば、要請があるということがもしかしたら壁になるのかもしれませんけれども、そういったものがあれば大学にはそういう専門の方がいるという形で、巡回でもいいし、もちろん職能集団としての巡回としての相談機能というのは広げられることもあると思いますけれども、大学にもそういうマンパワーがあるということです。実際熊本地震のときには、熊本大学から福島大学に教職員の派遣要請が来ました。ですので、どうやって授業を再開したらいいかというノウハウをもう既に大学の職員が持っていました。そういった被災者支援という形での、教員もそういったこと経験を持った教員もいましたので、１か月単位で１週間交代ぐらいでしたけれども、熊本大学のほうにがっつりと福島大学の教職員を派遣しました。依頼に基づいて協力をさせてもらったという形です。こういうことはできると思います。

繰り返しますけれども、学生の力というのは非常に大きいものがありました。若いだけで力になる。学生たちから声かけをする、話を聞いてあげる、そういうピュアなところ、コミュニケーション能力は絶大なエンパワーメントになりました。そういう方々は津波で家を失っているとか、家族まだ行方不明だというふうに、夜になるとしくしく泣いている学生が昼間気丈にお手伝いしているのです。でも、彼らはそういったことも頑張ってくれたというところがあります。

ちょっとこれは避難所ではないですけれども、仮設住宅に学生が住むということ、そんな活動を後々やったわけですけれども、仮設住宅の活性化という、これはコミュニティーをつくっていくという意味では大きな効果があったということだけ少しトピックで紹介するにとどめたいと思います。

そして、避難所の役割ということになりますけれども、これも冒頭に申し上げました。福島大学に関して言えば、学生のメンタルケア、学生の生活支援、そして原発がどうなるか分からないと、そういったときに直ちに残っている学生に連絡をしなければいけない。そのための２次、３次としての避難場所として福島大学に集合しなさいというような、そういうような指示を出すためにも学生の安全確保をするということでの避難所であったという。これも先に申し上げていましたけれども、学生だけではなく、避難所というのは近隣の、福島大学だったら金谷川かいわいの人たちの避難生活拠点になるのだと。これもここにいる人たちでないと配給物資は渡しませんよとか、食事は何人分のパンを届けてくださいという形ですけれども､福島大学はそのかいわいの分と学生の分でいつも100プラスしていました。180人が最大だったのですけれども、いつも280とか300というふうに本部のほうに要求して、おにぎりは全部ばらしてチャーハンやリゾットにしたりとか、必ず温かいものに作り替えていました。

たまたまイタリアのほうに視察をする機会がありましたので、ちょっと紹介しておきますが、避難所というのは日本では屋内なのです。ほぼほぼ間違いなく屋内なのです。でも、イタリア等々に行くと信夫ヶ丘競技場とかあづま野球場とかいうぐらいの規模で屋外が圧倒的に多いのです。今ここに見えるだけでも大体500人入ります。１つのテントがこのぐらいになりますかね。ですから、４世帯ぐら

い入れるのです。これを１日のうちに作ります。たしか24時間以内に作るという話になっています。日本は、災害救助法は要請があれば72時間以内に自衛隊等々を派遣しなければならないというので、そういうことですが、24時間というような線引きがあります。こういった屋外避難、ここも通常はサッカー場なのです。サッカー場を暗渠にして、その下に広大なテントの置き場所があります、地下空間に。というような形でたちまちこれは立ち上がるという。

キッチンカーがあります。キッチンカーがその日のうちに次の日の朝食、前日に日中被災があれば次の日の、24時間以内勤務だったら昼食から提供し、朝からちゃんとクロワッサンを提供する。チーズを提供する。スープを提供する。

寝食分離は必ず心がけていました。こういう食堂が設けられています。

子供の空間があったり、子供の空間もコンテナでやってきます。

ここはサニタリーということで、トイレとか、あと静養所あるいは医療所、巡回というよりは基本常駐です。病院があるような感じです。

なるほどなというふうに思いました。ビジネススペースがありました。Ｗｉ―Ｆｉが完備して、もう仕事をする人がいるのです。なるほどな、これは確かに必要だったかもしれないと僕も思いました。もちろん連絡を取るというような、情報のインターネット空間つくるということはよくあることですけれども、ちゃんとそこで仕事できる、ファクスとかもありましたし、Ｗｉ―Ｆｉもつながっていると。なるほどなというふうに思いました。

こういったところから福大の避難所の裏の思いという形で、冒頭に言った最低生活は維持されるべきだ。我慢する場所ではない。避難所でゼロベースで対処するのではなく、気持ちの面だけでもいいから､0.1プラスの状態で加速度的にプラス方向に持っていく一つの時間軸としての重要な時間だという。関連死防止に必ずつながる。被災時在宅者の拠点でもあるべきだと。

千差万別の方々がいる。そこの避難所の環境というのはばらばらなのですけれども、できるだけのことを使う。なければ、待っているのではなくて、くれというふうに要求しなさいというふうに言っていました。これこれがないから、あったらいいなではなくて、それは本部に要求する、あるいは外に向けて要求する。２週間ぐらいたったときに子供たちがマック食べたいと言いました。マックに電話したら、すぐ持ってきてくれました。お金払えないのですけれどもと伝えたら、結構ですと言われました。子供たちの分だけでいいのです。25個でいいのですと。誕生日の学齢の前の子供がいて、ケーキ食べたい。ケーキ屋さんにお願いしますと言ったら持ってきてくれました。ただ、材料が手に入らないから、ホール２つ分しか作れないのだけれどもって。でも、それでも要求してくださいと。福島大学は電車も止まっていまして、ガソリンもきゅうきゅうとしているところで、炊き出し来ないのです。市内にはいっぱい炊き出し来たかもしれないですけれども、福島大学には炊き出し来ないのです。でも、ガソリンたくさんあるから、ガソリン提供しますから、炊き出しに来てくださいってこっちから求めました。求める、要請するということはあって、運営としてはそれもマネジメントです。

個人的な個を尊重する。精神疾患の人だから、お断り、知的障害だから、お断り、そういうことはしませんでした。それはどういうふうにするかというところが運営の腕の見せどころ。リスク管理をします。夜うろうろする人がいて気持ち悪いというのだったら、そういった人は私がそこに泊まり込みで一緒に寝泊まりしました。何かしゃべりたいということであれば、夜中一緒におしゃべりに付き合ったりしました。

後々考えたときになりますけれども、トイレカーは能登半島で非常に活躍しました。そういう備えとしては一つの進化として備えておくべきだと思いますし、キッチンカーはどうしたらいいでしょうか。私はキッチンカー非常にお勧めです。そのときに、そのドライバーはどうするのだ、そういうのを調理する人はどうするのだというふうになると、イタリアの場合ですと、もうそういう専門職の人たちも災害時には仕事以上にこちらのほうの活動に参加するという登録者をつくっているのです。その登録者に対して派遣した場合は、その職場はそちらのほうに人を出さなければいけないということになっているのです。その上で雇用補償みたいなのについては国が補償すると。その人が１週間そっちのほうでシェフとしてのキッチンカーやっているのだったら、１週間分のいわゆる労働力補償という形では国の補償としてキッチンカーに私は出ていく。24時間以内に作らなければいけない。テントを立てる。建築関係の人たちが２日間仕事に行くと、現場の仕事がなくなる。それは補償する。という形の仕組みをつくっているというような形もありますので、こういったときに支援者動員についてはボランティア信仰でやるのか、システム化するのか、あるいは一般企業であったり、市民を動員するという仕組みをつくるのか､少しこれはアカデミックに検討しなければならないかもしれないです。

そのほか幾つかの問いについては、ホテル、旅館とかの等々項目としていただきましたけれども、簡単にコメントという形で羅列をさせていただきました。これは私の持論なのですけれども、私は大規模避難所があまり好きではありません。管理の面ではいいかもしれませんし、閉鎖していったときに最終的に集約していくというプロセスは必要かもしれませんけれども、コントロールが非常に、マネジメントが非常に難しいです、大規模は。ビッグパレット、あづまは、後々は整然とコントロールできましたけれども、最初はコントロール不能だった避難所だったと思っています。それは避難者の利益にならないです。ましてやそこでの心の傷も、避難している間に心の傷を負ったりとか、健康を害したりと。要介護状態の人たちが雨ざらしのところにいてというような、そこは設計も何にもなっていないので、テレビの前にわんさかと、ストーブの前にわんさかといる。通路も何にもない。そういうような形というと、やっぱり最初は中規模で整然とマネジメントする人員をつけて、そのための人員は、要望書等々にもありましたけれども、そのための研修をして、避難所リーダー、避難所のアドバイザー、避難所のコーディネーター、もしご要望があれば私は広域の避難所のアドバイザーをさせていただいても構いません。どうぞ要請があればご相談ください。

それでは、大変時間の配分が申し訳ありませんでしたけれども、委員長、こちらで時間としては切らせていただいてよろしいでしょうか。質問があればお受けしたいというふうに思います。

（沢井和宏委員長）ありがとうございました。

参考人の方からのご説明、ご意見の開陳等は以上となります。

次に、質疑応答の時間を約40分間の範囲で行いたいと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

それでは、ご質問のある方、お願いします。

（後藤善次委員）どうもありがとうございました。福島市の避難所を思い描くと、学校を利用することが考えられるのですが、小学校の体育館であるとか、中学校の体育館であるとか、そうなった場合には今先生がいろいろと例を出していただいた対応する側というのですか、避難所を運営する側の人材というのはなかなかそろえることが難しいような気がしておりました。それというのも、今市の職員も大体３名ぐらい、その方たちが入れ替わり立ち替わり運営上の指揮的な立場になる。それはあくまでも避難所に避難されている方の対応というよりは、避難所運営というような事務的なことも含めてあると思います。基本的には地域の住民の方が学校に避難をされた方の中で我こそはというような手挙げ式に最終的にはなるのかなと思うのですが、その方たちが運営をしてくださるというようなことが予想されるのですけれども、そういった場合にその方たちにどのような体制づくりというのですかね、またそれを誰が指揮を執るのかというようなところ、そんなところをお教えいただければなと思います。

（鈴木典夫参考人）今後藤委員の見解は非常に私もいいと思います。避難所運営、住民の方々にお願いするということだったりとか、被災された方も運営に加わるというような形がいいのではないかというふうに思います。果たしてそういう方々にお願いするだけのそういう学びの場を提供できるかということが一つの課題だというふうには思いますが、これもやっぱりスモールステップのところからでもいいと思うのです。そこの住民の方でしたら自主防災組織の方であったりとか、あるいは町内会の役員さんも研修会ということではなく、講話を踏まえたところでの触れるというところで、最終的に全部マニュアル本として習得するということだけではなく、避難所はどういうふうにあるべきかということだけを啓発的にしていただくというところがまずステップになるのかなというふうに思います。その上で市の職員であったりとか、自主防災組織の方であったりとか、そういった方々が避難所のリーダーとなるような研修を受けるというような、それは福島市だったら福島市のマニュアルをつくられたらいいと思いますし、今もう全社協であったりとか厚生労働省のほうでもこういう避難所支援リーダー養成講座だったりとか、アドバイザーの養成講座等々もありますけれども、そこには順を追って積み上げる形でそういう人を育てていくということを計画的にされていったらいいのではないかなと思います。

まとめると、住民の方々あるいは被災者というふだんからの意識のところでまずはユニバーサルですよ、権利としてやるものですよ、我慢するところではないですよ、できないところがあってもそれは求めてくださいと、できないからという話で、こうやってください、こうしてください、お願いし

ますということをいろいろ言ってもいいのですよって、そこで福大だから、できるではなくて、学校のスペースをつくればこれはできる、これはできないということの工夫で住民の方々中心にしながら運営をしていくということはよかろうと思います。そこに市の職員さんが本部とのパイプになったりとか、あるいは市の職員さんは２泊３日で帰るのではなくて、福島市はそういうことないのですけれども、福島県は２泊３日で交代だったので、非常に困りました。福島市は１週間という中期的なスパンで滞在型で最初からいましたので、そういった人たちと本当のつながりをしっかりとつくってもらうという、そういう住民参加が非常にいいと思います。

（後藤善次委員）どうもありがとうございました。

（宍戸一照委員）前に福大避難所で心がけたことというふうな記載がございまして、そこの中でコミュニティーをつくる、当初のものと２週間を経てからというふうな書き方があったわけですが、東日本大震災以降、本市における避難所というのは短期的なものが多くなっていて、長くても二、三日というのが多かったわけですけれども、避難所開設においてやはり短期的なものと長期的なものにおいては違ってくると思うのです、受入れ体制も含めて。そうした場合、先生とすれば短期的なものはこの程度までのレベルが必要ではないかというような考え方があると思うのですが、この程度は設置しておかなければではないのか、長期的には先ほど先生が福大での経験を基にしていろいろとお述べいただきましたけれども、短期的に避難所を設置する場合、最低限この程度のレベルの対応というか、資材を含めてこの辺は必要ではないかというようなご見解はおありでしょうか。

（鈴木典夫参考人）福大避難所で心がけたところという形で、当初からそういう心がけたところと長期的にというような、結果長期的だから、こういうことをやったということはあるのですけれども、短期で言えば、台風19号のときの福島市内の避難所というのは非常に短期で、３日間のところもあれば、長くても５日間ぐらいとか、１週間ぐらいで終わったかと思いますけれども、そこを想像したときに、長いスパンでコミュニティーづくりということではなく、最初からということであれば、私は居場所をつくるということは、短期であっても小さいところでもそれは必要だというふうに思っています。有象無象で集まってきて避難するという形で過ごすという場よりは、そこでやっぱり一時的にも共同生活をするという中で、スペースをつくっておくというのは大事なことだと思います。そこで日常の話かもしれませんし、ちょっとした避難談という話もするでしょうし、生活の情報交換というのは実はそういうところからの話だったりとかもできますので、それは避難者の多い、少ない、あるいは期間の短い、長いにかかわらず、一般的に言えば居場所をつくるということは最低限大小、長短にかかわらず最初から確保しておいたほうがいいのではないかなというふうに思います。

（宍戸一照委員）それはつまるところ例えばパーティションとか段ボールで居場所の空間、それぞれのスペースをつくってあげると、そのぐらいの居住性の確保は最低限必要ですねというふうな見方でもよろしいわけですか。

（鈴木典夫参考人）そうですね。もちろん施設によっては独立した部屋を充てることもできるでしょ

うし、それがなければパーティションでもいいでしょうし、極端な話、パーティションではなく夏だったら扇風機を置いて、そこの空間２メートル、３メートルぐらいは雑多なものに使わないということだったり、先ほどの福大の場合だったら、こたつを置いたというだけです。こたつを置くということで、そこで先週までは全然知らない場所に住んでいた大熊の人と浪江の人がこたつに当たって、ミカンを食べながら子供の話をしているという話、そういう場所があると自由に使うという話になってくる。コミュニティーというのは、何か名簿を作って実名の人たちだけの町内会をつくるという形ではないと思います、避難所の場合は。だんだん長期になれば実名の付き合い方ができるのですけれども、最初から実名性ではないというふうになれば、居場所をつくって、匿名でもおしゃべりができるという空間をつくることだけでも一時的なコミュニティーというのが形成されているのと同様な効果があると思います。

（宍戸一照委員）実は私ども先週先進地視察ということで視察してまいりました。その中で文京区は各大学、医療スタッフのいる大学とか、あとは看護師さんがいる大学とか、そういうところと連携をしていて、例えばそれぞれの避難所に医師とか看護師さんの派遣ということで協定を結んで、大都市ということなので、大勢の皆さんが集まると思うので、連携を進めているのですが、例えば本市において様々なマニュアルとか地区防災計画とかつくって、避難所対策というのをしているわけなのですけれども、そういうものについて、先ほど先生からアドバイスの必要性があればというような話でありましたけれども、本市としては福島大学のそのような知見、研究というか、活用との連携とかアドバイスというのは求めた経過はあるのでしょうか。

（鈴木典夫参考人）求められた経験はありません。熊本大学は、先ほど言ったように、要請がありました。東日本の経験を持っているということは、国立大学の中では福島大学の経験というのはやっぱり随一なのです。という形で熊本大学のほうから直接その経験を貸してくれという、ノウハウを提供してくれというのがありました。

今委員がおっしゃった部分については、やはり看護学部があるところについては、医療行為だけではなく、健康チェックとかバイタルチェックは十分学生さんたちがやるということは大きなメリットになっています。能登においても石川県立看護大学の学生たちがそういうような形で入ってきたりとか、ボランティアという形でも看護系の大学がそういった健康チェックについて、１週間ぐらい滞在して避難所の中でのケアをしたりとかという話がありますので、もちろん福島においてもそういう医療行為とまた別に健康チェックという話だったりと。さらに言えば、これは通常のマンパワーと同じなのですけれども、潜在看護師さんだったりとか、そういう方々がいらっしゃるわけですよね。そういう方々にいっときだけ健康観察みたいな形をちょっとお願いするような形も組織化していってもいいのかな。実を言うと大学だけがリソースではない、我々の身近なところにもそういう方がいらっしゃる、保育士もそうかもしれない、介護関係の人もそうかもしれないということも大きな資源としてイメージを歯車の一つに加えてもいいのかなと思います。

（宍戸一照委員）ありがとうございます。

（石山波恵委員）ありがとうございます。避難所における名簿作成とか、あと物資の詳細等とかの活用とかというときは体育館というか、避難所のデジタル部分をお聞きしたくて、15年前ということなのですけれども、私たちも先週見に行ったところでもやっぱり文京区とか多言語でデジタルを使ってということで、タブレットを使いながら名簿作成とか、そういう部分のところであれだったのですが、このときってＷｉ―Ｆｉ環境とか、あとアナログで全部やったのか、それともデジタル、15年前ってどんな感じで進んでいったか教えてください。

（鈴木典夫参考人）双方向性のデジタルを使うということが非常に難しかったです。福島大学はその点は逆に非常に難しくて、学内イントラネットを使うということができないのです。そこから万が一という話があると、個人情報とか成績情報がネットから視認されると駄目なので、避難所もインターネットを敷設したのですけれども、学内のポイントを使うことができなくて、それは駄目だということで、だから外からのポイントをわざとつくらざるを得なかったのです。それに時間かかりました。

実を言うと、通常の人が使うインターネットをやるというのが一番時間かかったというところがありました。そういったところで、本来だと公共の空間の中でＷｉ―Ｆｉを使えるというのは、フリーＷｉ―Ｆｉを使えるという環境になれば、それもやっぱり時代とともにステップアップしたところだと思うのです。それが双方向で共有できるようなシートを使ったところで、例えば支援物資の管理は普通のマーケット管理でやっていくととてもいいのです。私たちはアナログでやったのです。物資管理もやったのです。経済の学生にとってみれば、こういう在庫管理なんていうのは勉強しているのだから、そこでマーケット方式ですから、店頭に物資がなくなったら、在庫品を出してきて、どのぐらい１日でなくなるかというの大体傾向分かってくるので、そういう形でマーケット管理しなさいという形も、１日に何がどれだけ出て、何が入ってきたかというのを在庫管理というのをやっていたのですけれども、それは単なる情報処理をやっただけで、デジタルという形を使っての環境づくりは残念ながらでしたけれども、今言ったような在庫管理だったりとか、あるいは情報としての自治体からとか国からの情報のデジタル化だったりとか、これはもしかしたらジャストアイディアになってしまうかもしれませんけれども、いっときの空間でもちょっとＬＩＮＥをつくっていったところで、友達ではなくてもオープンチャットでのＬＩＮＥグループをつくっていけば匿名性も保てますし、参加したいという人たちがどんどんとＵＲＬを公開しなくても入れますし、友達にならなくても入りたいというふうに入ってこれますし、そういうふうになるとかなり早いと思います。外国語対応もそういう形で早いと思います。ＡＩなんて入れたら、そういう形で一つの効果的な活用ができると思います。

中越のときは、外国の方避難所にいたのですけれども、長岡市から出されるチラシとかが貼り出されても日本語分からない人が読めなくて、仮設住宅の申込みについてという貼り紙があったのだけれども、ご本人分からなかったという人がいて、そういうこともあるので、あのときは避難所からファクスを福島大学に送って、福島大学に英語の先生と中国語の先生に待機していてもらって、即座に翻

訳してもらって、即座に送ってもらう、それでも２時間ぐらいタイムラグがありましたけれども、それを今デジタル化するとというふうなイメージだと思います。

（鈴木正実委員）ご説明ありがとうございました。大変参考になるというよりも、目からうろこの話ばかりで驚いているのですが、とにかく先生おっしゃった一番初めの避難所はもともとユニバーサルな存在だというその定義づけ的なものは、今現状を考えると避難所にそういう意味合いってなかなかついていないのが現実なのではないかなという、そんな思いを持っているのですが、今後こういう先生がやられてきたこと、心がけたことあるいは日常生活云々ということが本当にどの避難所でも運営マニュアルの中に入ってきて、しっかりしたユニバーサルな存在という形をつくっていくことというのが、我々の今住んでいるこの中での一般の避難所と言われる学校の体育館であるとか、そういうところでの実現性というのはどうなのですか。かなり職員の人が行ってもなかなか１人、２人ではできない。自治会の人もこういった考え方はなかなか持っていらっしゃらない。そういった方々への周知とか、実践のマニュアルというのですか。そういったものを広めていく手だてというのはどのように考えればよろしいですか。

（鈴木典夫参考人）物理的な関わりがあったので、そちらに触れたいと思うのですけれども、避難所の空間として、環境としてユニバーサルデザインといった部分については、学校施設であったりとか、公共施設の整備計画というのでは多分予算に基づいて年次進行でされていると思うのです。更新されていっていると思いますから、一気に全部という形にはならないと思います。でも、それは少しずつ改善されていって、もともとはユニバーサルな空間で学校も考えましょう、公共施設も考えましょうという形を整備していくというものと、それが一気にできないということであれば、それは今あるもので使えるもので使えたらここは、ちょっともうイメージが古いかもしれませんけれども、和式のトイレはこういうことをやれば洋式に利用ができる、ここの段差についてはこういうものをあらかじめツールとして、グッズとして用意しておけば、そのときのテンポラリーな、一時的なユニバーサルな環境をつくることができるという形については、私はこれ地区防災計画と同じように、私たちの地域の避難所はどういうところであって、うちの小学校の改修計画は５年後か６年後か知らないけれども、でも地区防災計画を策定するときにそこを避難所で使うのであれば、この点はこういうふうにあらかじめ考えておこうではないかというようなところをやることだけでもかなり環境面は変わってくるだろうと。

　加えて、どういう機会を通じてかというと、地区防災計画というのは、やっぱりこれはつくらなければいけないという形になっていますけれども、福島県全体は非常に低調なのです、地区防災計画の策定率というのは。そのときに、福島市のところにも書かれていましたけれども、地区防災計画は住民の人たちの手でつくっていきましょうという、こういう方向性が示されていて、それが物すごく僕はいいと思っているのです。そのときにうちの避難所はこんなところだから、こういう工夫しておいたらいいよね、こういうところ駄目だよねという話はもう一つのユニバーサルな空間を考える、地区

の小学校区の人たちで考える一つのチャンスをつくることになると思うので、地区防災計画に少し力を入れてみたらどうだろうかという話であったりとか、もう一つはこれもなかなか進まないのですけれども、災害時要援護者のための台帳、要行動支援者ですよね。その点の把握は大分進んできているのです。ただ、今度はそういう人たちに対して個別支援計画をつくりましょう、個別支援プランをつくっていきましょうというのがまだ10％台ぐらいなのです。こういったところに関わるというのは、地域包括の人だったりとか、民生委員さんだったりとか、そういった方と避難時要行動支援みたいな形のプランをつくるときに、そういう方々がいらっしゃるといったときに、そこに間接的に関わっている人たちのしっかりと意見を吸い込むということもどこかで、避難所の環境を変えるとか、避難経路を考えるという話にもつながってくるので、１つの施策をちょっと上積みする努力をされるということがこれからの方向性なのではないかなと。

（鈴木正実委員）分かります。ありがとうございます。

（半沢正典委員）本日はありがとうございました。今の鈴木委員の質問に重なる部分があると思うのですけれども、先ほど冒頭に避難所を閉鎖したときに日本一の避難所だという評価を別の２人からいただいたというお話いただいて、では福島市それを目指してどうあるべきかというふうに考えた場合に、今おっしゃったようなユニバーサルな存在だということで１から７までいろいろ記載されていただいたやつを具現化して、今のやり方としては今ある制度にちょっと上乗せしたりというような話いただいたのですが、それで教えていただきたいのは、実際問題、福大、３.11あったときに実際指定避難所にもなっていなかったので、あまりマニュアルは多分なかったのかなというような状況の中でここまでできたというのは、やはり先生のアドバイザー的な司令塔がしっかりしていたからだというふうに私は感じるところがありまして、今この７つを各福島市の避難所にマニュアル化して渡した場合に、そこまで実際できるかなというような壁にぶつかりまして、その答えも、先ほど言ったように、避難所、研修とか地区防災計画の話とかされたのですけれども、すぐには、そういうようなマニュアルがあって、やはりソフト面が大切で、司令塔になる人がそういうような要求をうまくチームとしてまとめられればいいのでしょうけれども、なかなかできないと思う中で、それに近づける努力というのは、さっき言ったように、研修以外にはないのですか、それともふだんからこういうような組織とか、何かそういう、ふわっとした質問で申し訳ないのですけれども、こういうような状況ができるようになるためのソフト面のアプローチというのはどういうところに気をつけていけばいいのかなということを教えていただければと思います。

（鈴木典夫参考人）福島大学ができた部分というのは、確かに福島大学の環境があったから、できていた部分というのは多分にあります。なので、ほかのところを全く同じようにやってくださいというふうなところまでは求めてはいないです、まずは。逆に福大が最善かというと、そうではないと。なぜ日本一だというふうに言われたかという一つの要因は、避難された方々との間のコミュニケーションが非常にうまくいっていたのです。医療チームが３回ほど来ました。そのうち心のケアチームが１

回だったのですけれども、ストレス調査をされたときに、福島大学の避難所のストレスに問題ある人たちが１割もいないという形で、心のケアチームがびっくりして帰ったというケースがあるのです。それはコミュニケーションという話なのです。ですから、このときにこういう方法を取れ、このときにこういう方法を取れということが実を言うと鍵ではなくて、私はとにかく被災者と学生だったり、被災者同士だったり、あるいは文部科学省とか内閣府からも再々視察が来たのです。そのときも被災者の人たちも、その人たちもどんどんおしゃべりをさせるという、新聞もメディアも入れました。思いの丈、不満があったら新聞記者さんにぶつけてくださいという話で、それはちょっとしたあれですが、コミュニケーションといったものをとても重要視していて、その結果、少し心に落ちたのかなというふうに思っています。食事がよかったとか何か、そういう話ではなくて。

となると、ではコミュニケーションのつくり方をどういうふうにやりましょうかというのは、私ふだんのいろんな集会の中でいろんな人と声を交わすという機会をつくるという話がコミュニティーつくるベースのベースだと思いますので、だから私の専門からいえば、サロンをやるのだったらサロンの中でおしゃべりしましょう、それで主催する人たちとおしゃべりしましょう、外から何か支援のある人はその人とおしゃべりしましょうという部分の積み重ねを仕掛けていくとか、おしゃべりをする機会をつくるという話が実を言うと防災訓練ではないと思っているのです。あるいは、別なところで認知症の方とどういうふうなコミュニケーションを取りましょうなんていうような課題を持って地区ぐるみで勉強会やったりなんていうケースがあったのですけれども、そのときなんていうのはまさに認知症の人たちの理解がどうこうというのは前座の話であって、どういう技術を持って認知症の人たちの対応をしましょうではなく、認知症の方がいたらどういうような会話を交わすかということだけの勉強会だったのです。びっくりさせないように声かけましょう。突然声かけたりしないで、自分から名のりましょうとか、そういう形でやるのです。コミュニケーションの取り方という部分が一つの満足度につながるのであれば、防災という冠ではなくて、皆さん方の日常、地域活動の中でそういった弱点を、うちの地域はそこが弱点だというのであれば、そういう機会をつくって、そのときに仕掛け人の人が実を言うとこういうつもりで、それに備えていきましょうという形が結果的に、福大が最善ではないので、その場所に合った工夫なのです。ないものはない、でもあるものを使う、なかったら求めるというのがさっきの話なのですけれども。という対応がこれも一つの在り方ではないかというふうに思っています。

（半沢正典委員）ありがとうございました。

（三浦由美子委員）ご説明ありがとうございました。本当に私も感動してしまって、いろいろご説明をいただいた中で、当初私はこの委員会で今回のテーマで取り組むときに、自分自身としてはそういった避難所を設営するときに行政としてはどういう形で、行政だけではできないので、自主防災組織とか、そういったところの方々と共にどういうふうな形で避難所運営ができるのかなというところから今回の課題を調べていきたい、知りたいなということで、先日視察に行ってお話を伺ってきたとこ

ろではあったのですけれども、結局のところ３か所伺った中でも共通しているところはどちらもやっぱりマニュアル化をしていて、ぱっと見て分かる言葉遣いで、来たあなたはこれ、あなたはこれというふうな分配の仕方の中で、自分のそのときに協力していただく方を分配しながら、早く設営をして、こういう形からやりましょうというマニュアルの中でやっていくところから入っていくという、そこまでもなかなか福島市としては想像がちょっとできないというか、そこまで行っていないのかなというところの入り口というふうには考えていたのですが、先生のお話をお伺いして、実際のところ行き着くところはどこなのかと、目的というところをやっぱりまだまだ全然福島市としては捉えていないのではないかなというふうに思ったりとかしたところで、本当に入り口も大事で、そうすると素早く対応ができる環境ができて、その環境づくりをするのに、今までのご説明の中でも重複するところあると思うのですけれども、最初にやらなければならないことというところで、行政の中での役割、求めるところというところのポイントというか、そういったところなど先生の中でありましたら教えていただきたいなと思うのですが。

（鈴木典夫参考人）実を言うと行政としても全ての職員の方が一斉にというような、そういうリーダー的な役割を帯びることは一気には難しいというふうに申し上げましたけれども、職員こそ計画的にそういうような人を育てていくという話がいいのかなというふうに思います。そこからやっぱりじゅうたん敷くようにやっていくというよりは、支所単位で一緒になってそれをデモンストレーションやるようなところから始めたらいいのではないかなというふうに思います。これが現実的かなというふうに思いますし。

それとこれは重なりますけれども、地区防災計画とか避難支援プランのところに関わりを持っている人たちが少しそういう役割を負って広げていくということがいいのではないかなというふうに思います。ただ、本音で言えば、具体的にモデル的にやるというのだったらば、しっかりと避難所訓練をしてくださいというふうに言いたいです。どこそこの地域で、ここの地域は役員さん絡みで役割分担をし、マニュアルもありますよね。運営だったりとか、物資だったりとか、衛生管理だったりとかという役割を設けていきます。日赤の支部の方はこうしましょう、町内会の会長さんあたりはこういう形でまずは避難所運営に当たりましょう、消防団の人はまずは声かけに行きましょうとかいう形を一回モデル的にやりましょうという話は支所単位ぐらいの中のどこかで重点的に、そこは具体的にやれるところがあったらそれは望んでいるところです。

（三浦由美子委員）ありがとうございます。

（鈴木　哲委員）いろいろありがとうございます。ちょっとだけ気になったのは、要求はするべきであって、我慢をしないことが大事、これはすごく私もよく分かるのですけれども、たださっきおっしゃったように、マクドナルドさんがすぐ持ってきてくれたり、ケーキをすぐに持ってきてくれて、あまりかない過ぎると、かなわなかったときに逆に不満を述べたりする方とかっていらっしゃるのですか。あとは、そういう要求する人が結構多過ぎるとか、では僕はこれ、私はこれって多くなったとき

に、それぞれ対応してあげたりするのか。

（鈴木典夫参考人）これがまさに避難所運営のマネジメントなのです。できないことはできないというふうに避難所のところでは言うべきところがありますので、過度な要望を受け止めてしまうことはイコールではないという形。なおかつ本人たちが避難はしているのだけれども、自分たちでやれるところはやってもらうという部分もきちっと線引きをするという、何々を持ってきてくださいといったときに、私たち全部そういう人足ではないですから、自分でこういうことをやってみてはどうですかというふうにしむけるということもやり方としてありますので、全部やってしまうことではない。やれないことはやれないというふうに説明するという部分がまずは、これはマネジメントなのです。避難所運営としてのマネジメントとしての力量に入ってくると思います。

ただし、過度なリクエストは断るという話なのですけれども、何とかしてあげたいというやつについては、それも工夫次第なのです。工夫なのです。できないから、やめてしまうという話ではないです。ちょっと矛盾するかもしれない。できないものはやれないと言っているけれども、できないから、最初から全部できないというふうに投げ捨てるものでもない。これはできるのだなというふうに思えば工夫なのです。やることによって全部やってしまうことでもないし、一部できることは工夫してやるという、これも一つの例え話になるかもしれませんけれども、さっきの物資の問題で、非常に僅かながらの差し入れがありましたと、支援物資として、食べ物として。これをみんなに分けると何で俺がみたいな話になったりとかという話であれば、これを福島大学の避難所で何をしたかというと、自治会の人と話し合って、こんなゲームをやって、ゲームに勝った人にあげましょうかといったときに、自治会の人と意見を交わしたから、できるのです。それは大きかったのです。別に自治会の人だから、会長さんといいながら何か役割を押しつけるということではなく、何かがあったらその人を通して聞いてみるということだけやったときに、できないことはできない。あるいは、難しいけれども、できそうだったら何とかしよう。その何とかしようという部分に工夫の一かけらがあるのだったら、それもこうしてやってみようと思うのですけれども、ゲームやっていいですか。いいですよ。では、みんなでじゃんけん大会やりますと言って、200人のじゃんけん大会で勝った、負けたで後腐れなくちゃんとお菓子を分配することができました。これマネジメントだと思います。

話は戻ってしまいますけれども、そういうマネジメントできる人はそんじょそこらにいないので、少しずつ積み上げて、やっぱり訓練とかしなければいけないですし、ではそういう人ばかり育てたらいいかというと、一般的にはふだんからのコミュニケーションが取れるというような機会をつくって、顔なじんでいるというようなことを慣れさせておくというのもいいでしょうし、ちょっと飛ばした話なのですけれども、よく施策的には防災というのがあって、減災というのがあって、それに備えるという、備災というのですけれども、認災って勝手に言葉使ったのですけれども、災害時にはこういうふうに対応しましょう、避難所だってユニバーサルですよと、女性のことを考えるのは当たり前ですよと、そういう認識でいましょうよと。そういう認識をする。災害について勘違いしないでください

という、そういう、災害が起きたらこういう認識でいましょうというような、何か少し哲学的なところもあるのですけれども、認災って大事なのではないかなというふうに思って、とどのつまりは必ず起きますよという認識を持ちなさいから始まるのです。だから、いつまでたっても堂々巡りで、防災、減災、備災という話をやっていって、認識が一向に定着しない。避難所というのはユニバーサルなところであって、我慢するところではない、できないことがあったら求めなさいという認識の下でやるという、災害に対しての認識を変えましょうというのはどこかでマニュアルに載せてもらいたいぐらいです。行動マニュアルではなくて意識マニュアルかもしれないです。

（鈴木　哲委員）ありがとうございました。

（後藤善次委員）イタリアのスタジアムに個々のテントを作った、その個々のテントには冷暖房はあったのですか。

（鈴木典夫参考人）ついています。あと、食事のセットのときにも次の日の朝からフォークとスプーン必ずついています。

（沢井和宏委員長）ありがとうございました。本当にまだまだ時間が欲しいところでありますが、時間ですので、参考人への質疑については終了したいと思います。

以上で予定しておりました参考人招致は終了いたします。

鈴木様におかれましては、大変お忙しい中、長時間にわたって本委員会のためにお話しいただきまして、本当にありがとうございます。我々も加賀市と三島市と、あと文京区と３自治体を視察してまいりましたが、いずれもやはり行政の立場での物の考え方とか設置の部分であって、なかなかそこの部分で抜けていた肝腎の避難所のエキスと言われるような今日は精神の部分でこのように捉えるべきだということで、今まで視察で聞いてきた内容とはやはりちょっと方向が違って、大変今日は有意義なお話が聞けたかと思います。本当にありがとうございました。

それでは、参考人退席のため、委員会を暫時休憩いたしまして、25分から再開いたします。

午後３時16分　　休　　憩

午後３時24分　　再　　開

（沢井和宏委員長）総務常任委員会を再開いたします。

参考人招致に対する意見開陳についてを議題といたします。

それでは、本日の参考人招致に対する各委員のご意見を伺いたいと思います。

それでは、半沢委員のほうからポイントを絞ってよろしくお願いします。

（半沢正典委員）大変参考になりました。それで、マニュアル的なもののひな形がちょっと示されてよかったなと大いに感じています。ただ、マニュアルどおりできるかどうかというのは基本的には、私もお伺いしましたけれども、地元でやるにあたってはなかなか、マネジメント力が必要なので、そう簡単にはすぐにはできないだろうということなのですが、熟度の濃淡はあるにせよ、やはりストレ

スをできるだけ抑えるということが避難所運営には非常に大切なポイントだというふうに分かりましたし、そういう観点では鈴木哲委員が質問していただいたのですけれども、やっぱりふだんからの地域の、これに特化するわけでなくても、コミュニティーの促進というのが災害時に、今回特段あったわけではないですけれども、特にやっぱり避難所運営とかについては重要だなということを改めて自覚したという意味で大変勉強になったということを申し上げておきます。

以上です。

（鈴木　哲委員）とても参考になりました。やはりそういうある意味避難生活というのは集団生活になりますので、先ほど鈴木先生おっしゃったように、コミュニケーションの取り方、これはやっぱりすごく重要性があると思いました。ただ、先ほど半沢委員がおっしゃったように、なかなかマニュアルどおりできる人、やっぱり人材育成というのもこれから大事になると思います。例えば大学とかの授業に組み入れたりとか、高校でもそうなのですけれども、教育の一環として防災意識を組み入れるということはありなのかなというふうにちょっと思いました。というのは、私らが小さい頃よりも最近特に災害が多過ぎるので、小さいうちからそういう意識を植え付けておくということは非常に大事なのかなというふうにも思いました。何より災害時に工夫をしっかりして、できることは自分たちでやると、自助の精神というのは大事であるし、そこがかなわないときにみんなで工夫して、みんなで助け合ってやっていきましょうと、そういうことが大事なのかな。そのためのコミュニケーションの取り方というのは意識の中で持っておかなくてはいけないことだなとは思いました。

以上です。

（後藤善次委員）地域住民、避難者、その方たちに避難所運営とはこういうものなのだというマニュアル化、それからそれを啓発する支援のリーダーを育てる日頃からの体制づくり、それには地域住民の参加型あるいは全然地域に関係しない避難所にたまたま参加するという方も含めて役割のイメージづくりを日頃からつくっていくことが大切でないかというふうに感じました。

（三浦由美子委員）私は、鈴木委員も質問されていました避難所想定に備えてユニバーサルデザインというのは全市民にやっぱり理解、認知させていかなくてはならない、私たち自身もですね、というふうにすごく認識させていただきました。最後に先生がおっしゃっていました認災という言葉も、やはり常に災害はあるのだということを私たち自身、市民の皆さんも認識しているという中での防災意識というか、避難所の在り方などもやっぱり広く皆さんに理解していただくように私たちから発信していかなくてはならないというふうに思いました。その中で行政の中でもやはり訓練などもしっかりとやっていく中でのコミュニケーションという認識の心合わせもしていく必要があるなというふうに先生のお話から確信したような形です。

（村山国子委員）避難所の在り方として、日常生活を確保するというのが一番だなというふうに思いまして、この中ではこたつを出したりとか、子供の遊び場とか、コーナーとか、そういうのをつくっていて、日常を避難所であってもそういうことを確保していくというのが重要だな、それがストレス

フリーにつながっていくのかなというふうに思いました。あと、それをマニュアル化していくというのが必要なのと、あとマネジメントできる人材育成が最大の課題かなというふうに思いました。

（鈴木正実委員）私は、ユニバーサルな存在だという、避難所がもともとそういう位置づけなのだということをやっぱりもう一度しっかりというよりも、教えていただいた中身でそうなのだなというのを改めて実感したということ。そして、その中で何が必要なのかということが１番から７番の大学で経験したこととしてまとまっている。これなんかはマニュアルとして基本的に生かせるものではないかなという、そんな感じがいたしました。さらに、避難所がユニバーサルな存在だということを、地区防災計画の策定と一緒に私たちの避難所はこういうふうになっているといいねというのをその段階からつくり上げて共有していくことの必要性があるのだろうなという、そんな印象も受けたところであります。とにかく人材をどうやって育成していくか、そこのところ、その次の段階かなという感じがいたしました。

以上です。

（宍戸一照委員）我々が視察してきた各市とも小中学校の体育館が主に、学校が避難所であったわけでありますけれども、今回我々の福島市を振り返ってみると、体育館があったり、学習センターがあったりと千差万別なわけです。そうすると、そもそもベースになる居住環境が違うというふうな中において、今日先生は、鈴木委員もおっしゃったけれども、もともとユニバーサルな存在、ある程度の居住性というものを確保し、生活、個々人が尊重されなくてはならないというものを考えたときに、やはりマニュアルというか、そういうものの作成、時系列的に、三島市でも時系列的な何日、何日、何日と、ここまで整備しなさいという、ああいうようなマニュアルがしっかりできていますから、そこのところを考えていくと、福島市において快適な避難所というか、それを考えた場合、先生から今日聞いた内容を実現していくためにはまだまだこれから大変だなと。その一番はマニュアルの作成と、この前の当局説明でも開設は市の職員がするけれども、あとは自主防災組織に任せると言っているわけなのだけれども、肝腎の自主防災組織は各地区で防災計画をつくりながらやっている現在の途上であるわけなので、これからやっぱり福島市としては大変だなというのを実感しました。それと同時にやっぱり人材育成ですね。加賀市なんか、後の振り返りでも出てくると思いますけれども、加賀市、防災リーダーが600人もいるわけですから。人口６万人のまちで600人もいるということは大変なことなのです。いろいろと避難に関してやるから。

【「後で話したら」と呼ぶ者あり】

（宍戸一照委員）後の議題だけど、それを兼ね合わせて申し上げているので、申し訳ありませんが。

そう思ったものですから、人材の育成が大変だなと、これから防災組織での。

（石山波恵委員）今回市民が安心して過ごせる避難所ということで、この安心という、何があったら安心なのかということを考えると、もちろんハード的なもの、例えば体育館で通路をつくって、それぞれの居場所を仕切ってあげるという、そういうことも大事ですけれども、いかにストレスのない居

場所づくり、ソフト面の充実、温かい食事があり、そして自分がやる役割があり、人とのコミュニケーションがありということで､そういうふうなソフト面がいかに充実するかによって安心して快適な､居心地がいい、そして先ほど鈴木先生がおっしゃったように、避難所は我慢するところではない、健康で文化的なところであるべきだって最初に何回もおっしゃっていたので、その部分のところも我慢というところではなくて、やはりいかにソフト面の充実がストレスのない居場所づくりで、避難所の快適さにつながるのではないかなというふうに感じたことでした。

以上です。

（沢井和宏委員長）そのほかまだ言い忘れたことありますか。大丈夫ですか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

（沢井和宏委員長）ご意見ありがとうございました。

今おっしゃったように、今日のお話の中ではやっぱり避難所の在り方そのものという、避難所の捉え方についてもう一度我々が問い直されたような感じがしております。やはりその精神を今後まとめていく段階において入れていかないと、ソフト面での避難所の捉え方をもう一度提言の中に入れて、それを市の中で広めてもらうというのが１つ大きな仕事かな。あとは、避難所運営について役割分担をきちっとやっぱり地域の中でできるような、そういう配慮をしていかないと駄目で、最後に先生も訓練をしてくださいと言っていましたが、やっぱりそういう訓練をしていくことが必要なのかな。その訓練の中にやはりふだんから、学校教育もそうなのですけれども、地域の人材がコミュニケーションの取り方あるいはコミュニティーの中での人間形成がどうなっているのかというようなことも非常に重要なファクターになってくるのかなと思っております。そういうのを見据えてマニュアルを作成していくのかなと思います。

今日いただいた意見については、後ほど正副委員長手元で内容を整理させていただきまして、また今後の委員会の中でお示しさせていただきたいと思います。

では、以上で参考人招致に対する意見開陳を終了いたします。

次に、行政視察に対する意見開陳を議題といたします。

初めに、行政視察に対する意見開陳に先立ちまして、前回の委員会で実施した当局説明に対する意見開陳の内容について資料にまとめましたので、そちらをご覧いただきたいと思います。先ほどの資料の中で意見開陳の内容についてということで当局説明というものがあります。７名の方の意見を取りまとめたもの……

【「どのフォルダーですか」と呼ぶ者あり】

（沢井和宏委員長）今の今日の日付のフォルダー、２月５日の日付のフォルダーの中の意見開陳の内容についてということで、括弧して当局説明というのあります。７人の方の意見と、あとキーワードになるものがまとめてあります。

それで、各委員からいただいたご意見の中からキーワードと思われる項目について右側の欄に抜き

出しておりますので、ご覧ください。それで、複数ある回答のものについて赤で示してあります。特に多かったものは、自主防災組織、避難訓練、それから避難所に求めるべき快適さ、市民への周知、自助意識の醸成、それから東日本大震災というものが多くありました。

お読みいただきまして、資料の中の発言で訂正とか、こうではないというようなとか、あと補足とかありましたらお願いします。

【「なし」と呼ぶ者あり】

（沢井和宏委員長）これも大きなまとめの柱になっていくものだと思いますけれども、ではご確認いただいたということで、ありがとうございます。

これらのキーワードを参考にしていただきながら、続いて行政視察に対する意見開陳に移りたいと思います。まず、１月26日から28日にかけて実施しました行政視察において、加賀市では民間防災集団と連携した避難所の生活環境対策について説明を聴取し、民間防災集団、発災時、平常時の民間防災集団との連携、防災コミュニティスクール事業の項目に回答をいただきました。

三島市では、避難所運営における住民参画及び職員連携について説明を聴取し、避難所運営マニュアル、避難所運営会議、職員意識向上の取組の項目について回答いただきました。

文京区では、避難所へのタブレット端末の配備、民間施設を活用した避難所の確保について説明を聴取し、通訳機能を活用した外国人及び聴覚障害者への対応、災害協定に基づく学校施設の活用、民間施設を避難所として活用する際の課題の項目に回答いただきました。

それでは、これより行政視察で聴取した各市の先進的な取組について、各委員からご意見をいただきたいと思います。お一人ずつ３市について、それぞれについてご意見、どこどこの市はこう、どこどこの市はこうってその市に対するご意見をお述べいただきたいと思いますが、特になければ省いてもいいですけれども、お気づきになった点を市ごとにお述べいただければと思います。よろしいでしょうか。

それで、今度は時計回りで宍戸委員からいきたいと思いますので、よろしくお願いします。

（宍戸一照委員）まず、加賀市、先ほど申し上げてあれでありましたけれども、やっぱりここは民間ボランティア組織との自主防災組織、この活動が非常に熱心だということ、先ほど申し上げたように、600人養成して、人口が６万人ですから、大変な数の防災リーダーがいられて、防災士がいると。ですから、福島市の場合、各町内会の自主防災組織が高齢化で２年交代、１年交代になっている状況を考えると、やはりそういうふうな防災リーダーとなるような人材を今後育成していく必要性があるのではないかというふうに感じましたので、それがこの前の当局の説明でもあったように、これから避難所の運営に関しては、鍵は開けるけれども、開設はするけれども、あとは皆さんにお任せをしたいということに通じるのかなというふうに感じました。

それから、三島市については、やはり思いましたのは避難所開設マニュアル、タイムテーブルから始まって、そういうものをしっかりとつくられていると。防災教育、そういうものもやられている。

それと同時にグッズ、これがいろいろとあるということで、こういうのを取りまとめて箱に入れて、すぐ開設した場合に活用できるような体制が整えられているということがやはり常に南海トラフでのあれで避難を余儀なくされている方々が自主防災組織をつくって、常にそういうふうな意見交換をしながら訓練をされて、そういうふうな防災グッズもまとめていると、ここはやはりすばらしいのかなと。

それから、文京区については、大都市圏特有ということで、本当に人数も多くいらっしゃる。しかしながら、ここも同じく防災のリーダーとなるべき自主防災、民間避難所を自主防災の皆様、そういうような方々が避難所運営指針にのっとって、マニュアルが１つの箱に入っていたと、あれはすばらしかったなと。やはり大都市圏でいろんな大勢の方が避難所に来たときに、ああいうふうなマニュアルにのっとってやられているということ。それから、大学の医学部の先生が、必ず震度５強になると医師が医師会と連携して派遣されて、そういうふうな緊急対策も既に整っているということが、先ほど福大の先生にお聞きしましたけれども、福島市の場合は全然その知見を活用していないということを考えると、見習うべきかなというふうに思いました。

以上でございます。

（鈴木正実委員）私も同じような感覚でありますが、とにかく加賀市の場合には防災リーダーが避難するまでを担当する、避難所に入ってからは防災士が避難所の中での運営に当たる、その役割分担が非常にしっかりしているというところが大事なのかなという感じを持ったところです。その中に女性防災のネットワークということで、女性目線から協力していただく体制づくりもある、あるいは自主防災組織の避難所運営に当たる当たり方、さっきのいろんな形でその辺を整えているところは参考すべきかなという感じです。

あとは、三島市においては、これまでの避難所運営の中で出てきた教訓、市民による主体的な運営ができなかった、避難所運営の方法が明確でなかった、トイレが不足していた、高齢者、女性への配慮が十分でなかったという問題点を出しながら、いろんな形でマニュアルを策定し、それに伴って市民、学校、三島市のそれぞれのこれも役割をしっかりつくっているところが非常に避難所設立の中では参考になるのかなという印象でした。避難所開設においては、先ほど宍戸委員もおっしゃったとおり、アクションシートによる設営の具体的なマニュアル化というのは、これは福島市でもしっかりコンテナに入れておくかというところまで含めて参考になったかなという、そんな思いでした。

あとは、文京区については、とにかく避難所運営の課題として説明があった中で、区ではなくて都が目指している避難所ということで、我々が思っていることと同じこと、誰もが不安やストレスなく安全に過ごせること、地域住民が協力して主体的な運営がなされること、発災後の地域の支援拠点になっているのだという、こういった避難所を設けるにあたっての目指すべきところをしっかり考えた上で、例の魔法の玉手箱みたいないろんなパターンが示されたマニュアルがそれこそ誰が行っても開けば分かるというような感じで避難所が運営できるということは、非常に我々としても考えるべきと

ころがあるなという、そんな印象でありました。

以上です。

（三浦由美子委員）私も重複するところばかりなのですけれども、加賀市ではやはり防災集団ということで、本当にたくさんの団体が存在していて、そして資格を取得しつつ勉強をしていて、防災ということに対しての全体的な意識が高まっているというところをすごく感じてきました。福島市でも積極的にそういった資格取得なんていうのも取りたいという方も呼び込めば、お話しすれば取りたいという方も出てくるのではないかなと思うので、そういった取得しやすい、そして参加したいと思う気持ちになっていくような形でこういった取組も参考にしていけばいいのかなというふうに思いました。

また、次の三島市に関しては、ほかの今までの委員もおっしゃったように、いろいろなグッズ、運営グッズを見て、やはりすぐに本当に誰でもそこで活動をする、リーダーになるというふうな形の意識も持つことも士気も上がりますし、そういったものがきちんとこれまでの経験の中でいろいろと見直しをかけられながらそういうふうになってきたという表れで、やはりそういったものの管理運営であったりとか、あとは食品のことに関してとか、そういったことも細かくチェックして管理をしている中でも、それも防災の意識の一つというふうなことだと捉えているというふうに話を聞いたのも、やっぱりそこに皆さんの意識があるというところもすばらしいところだなと思いました。また、避難所での運営の中でどこにどういったものが存在しているのかというふうに大きく半紙を広げて学校の体育館とかに貼り付けているということも、デジタルではないけれども、分かりやすい、誰にでも分かるという設営の仕方も工夫の一つですばらしいなと思いました。

最後に、文京区の場合には、環境がどうしても福島市とは全く違う都会の環境でもありますので、マンションはマンションの、そして戸建ては戸建てのというところでやれることを工夫して防災意識を高めていく、その地域での自助意識といいますか、そういったところで頑張ってやってもらいたいというところを東京都としていろいろと考えているのと、文京区としての環境でやっているというところがすごく分かりました。また、先ほど委員もおっしゃっていたように、マニュアルというのも誰でもできるというところで、安心してこれからこんな流れでやれば大丈夫だよというふうなところで後押ししてくれる一つの形があるということも取り組みやすいところかなと思いましたので、参考にさせていただきたいなと思いました。

以上です。

（後藤善次委員）加賀市は、人口６万1,000人ということで、職員の数も限られていると。それで、地域の民間団体をいかに活用していくかということについてきちんと手を差し伸べているというイメージがありました。役割分担をきちんと預けていると、そこを職員の方が要所を確認していく、そういうようなイメージに映りました。そのために防災士であるとか、地域の防災リーダーの育成に日頃から力を入れて、万が一のときにはその方たちに活躍をしていただこうという、そういうものが感じら

れました。

それから、三島市については、福島市の10分の１ぐらいのエリアなのですよね。そうすると、避難所もある程度隣接してくる、学校単位になると思いますけれども、そんなことで井上さんという説明してくださった女性が市の職員の方全体に自分の理想像あるいはイメージ、避難所についてはこうなのだというようなことを直接お伝えしているように感じました。職員の方には会計年度任用職員の方なんかも含まれていて、きちんとその方たちが何をやらなければならないということを定期的に訓練されている、これは福島市で行っているような防災訓練に似ているのですけれども、意識づけの防災訓練になっているようなイメージが感じられました。

それから、文京区については、タブレットは37台、月3,500円の12か月ですか、それを各要所、要所のところにお渡しをしていて、災害情報システムというのを確立して、データの情報伝達をいち早くするというようなシステムを組んでいるという、ここもエリアは本当に狭い地域で、福島では考えられないところ、住んでいる方たちの70％がマンションに住んでいらっしゃるというようなお話でしたので、災害については垂直避難、ほかに逃げるよりも上に逃げるというような、そんなことを徹底されているとすごく感じました。あと、大学が多いという前に話ありました。それから、後楽園のドームを持っているということで、そこは５万人収容される、その５万人入っているときに災害が起こったらどうなるのかと思いましたけれども、区がやるべきこと、それから警察あるいは国にお願いすることを明確にはっきりされておりました。ですから、避難者が一時帰宅困難者になった場合には、区ではなくてきちんと警察にお願いをすると、これは自治体として役割分担をしておくことはとても大事なことなのかな。文京区はこういう特性があるというところを福島に置き換えて、福島ではこういうことが起こるなということをきちんと役割分担をしておくことが大事でないのかなというふうに感じました。

以上です。

（鈴木　哲委員）まず、加賀市です。加賀市もスフィア基準に関して気にかけられていて、良好な生活環境をつくること、それとやっぱり私も気になっていたペットに関しての配慮もしっかりできている、そういう環境づくりされていると思います。自主防災組織立ち上げているけれども、やっぱり活動しているところとなかなかそうでもないところがいまだにあるということで、その体制づくり、詳細を詰めていくということでしたので、これはなかなかいろいろな自治体やっぱり同じような悩みを抱えているのだろうと思いますけれども､やはりそこが喫緊の課題なのかなというふうに思いました。それとあと、女性防災ネットワーク、この辺りの女性を配備していくという考え方というのは非常に大事なことだと思いますし、これを実際にやられているということは少し進んでいる部分があるのかなというふうに思いました。防災リーダーの育成事業などもしっかりされているので、防災意識としては高いものを持った地域なのかなという印象がありました。

続いて、三島市なのですけれども、地域でも避難所運営会議などしっかりとされていて、職員は現

地配備などもされているということで、最低年１回は訓練もしっかりされているということで、防災意識しっかり持たれている市なのだなと思います。プラス担当課ごとの勉強会もしっかりされているということで、防災意識に関しては市を挙げてしっかりした意識を持たれているというふうに感じました。

最後に、文京区。一番感じたのは、妊産婦と乳児救護所に４つの大学を指定しているということ、これはやっぱり文京区大学の数も多いですし、非常に有効利用しているなと。このうち女子大も２つありまして、そういうところも利用している、大学との連係プレーというのは非常にいいところがあると思います。それと、三島市もそうなのですけれども、こちらも避難所開設キット、非常にやっぱり便利、アナログな部分ではあるのですけれども、原点に返るとこういうことが一番便利だなということは、やっぱり改めていろんな便利な道具があるけれども、こういうことが便利なのだなということは感じました。避難運営に関しては、行政、町会の連携もしっかり取るということですけれども、最後は総力戦だと説明されている方もおっしゃっていましたけれども、自助、公助、共助、それを全てフル活用してやっぱりやっていかないといけないと、そういう意識、文京区辺りも人流なんかがとんでもないことになるはずですので、そういった意識しっかり持っていられているところ、それと57か所に職員を配備していると、そういう前もった準備も抜かりがないというか、本当に人が多いところなので、いざというときに備えて万全を期しているという思い、そういうものをすごく深く感じました。最終的には自立して活動してほしいということでしたので、一般の方々、現地の被災された方々がそういう意識を持ってもらいたいというのが一番であるということはほかの自治体とも同じ考え方であるということは私も認識させていただきました。

以上でございます。

（半沢正典委員）もう全て言い尽くしていただいた感があるのですけれども、加賀市につきましては、委員それぞれお話しいただいた防災リーダーの組織がしっかりとしており、そして機能しているというような印象で、防災士の育成、防災リーダーの育成も当市としても考えていかなければいけないのではないかなという思いを新たにしたところであります。そして、加賀市におきましてもう一つ、防災コミュニティスクールというのが機能しておりまして、小学校が避難所になるということで、防災関係団体の代表者としっかりと避難所運営についてのマニュアルが完成しているということで、私も質問しましたけれども、校舎のほうも機能別にしっかりと区分けされているところが大変印象に残りました。

三島市につきましては、やはり静岡県ということで、南海トラフ東海沖地震が想定されていることから、非常に職員、そして市民が備えのレベルがやっぱりちょっと違うかなという印象を受けました。避難所開設、うちのほうの防災訓練というのは、私が知る上では大体集会所に集まって、消火訓練と避難所、避難した人の人数確認と、あとおにぎり作って、消防署の講話聞いて終わりというようなイメージが私の経験上あるのですけれども、避難所の開設までしっかりと訓練していて、そしてそれに

基づいてアナログ的なのが非常に多いのが印象的で、そして好感を持てました。誰でも、そして電波の障害が仮にあったとしてもしっかりと避難所の運営ができるのではないかなというように想定できるほど非常に備えが物、人ともにレベルの高いのを見たというような印象があります。

そして、文京区については、面積も、そしてマンションも多いということで、福島とはちょっと違うなというような印象の中で、やはりデジタル化を最大限活用した避難所運営というところが勉強になりました。実際、災害時にデジタル機能が十分に発揮できるかと、要するに何でもそうですけれども、スマホでも通信障害が出たりというところがあると思うので、その辺ちょっと聞き漏れてきましたけれども、災害時で通信障害がスマホ等起こっても区が備えるタブレットはしっかりと機能している備えが十分あれば、あのような形も災害時大変役に立つなというような印象を持ったところであります。

以上です。

（石山波恵委員）皆さんがほとんどおっしゃっていただいたのですけれども、加賀市は民間防災集団４つあって、その中でも防災士と防災リーダーの役割分担がしっかりしてあった。防災コミュニティスクールがちゃんとやっていて、災害に対する意識の醸成されていました。

三島市に関しては、必ず職員は一、二名女性を入れるということ、あと学校のところに小中学校24校あるうちレイアウトがしっかりして、誰が見てもどこに何があるかが明確、あと衣装ケース、表から何があるか見える、避難所運営のグッズというところが印象に残りました。

文京区に関しては、外国人の対応、また帰宅困難者の受入れということで、37台の13言語対応タブレットを活用するやり方とか、あとまた民間との協定で大学や病院ということで協定してあったのが印象的でした。

以上です。

（沢井和宏委員長）ありがとうございました。今いただいた意見おおよそ、加賀市であれば防災リーダーと防災士の役割分担と育成に関してと、あとコミュニティスクールによる学校の配備、それから避難訓練等。三島市においてもやはり開設マニュアルのセットがあるというようなことなど意識づけがされている。文京区でも開設キットがあったりなんかしておりました。やはり３市とも具体的に避難所を開設するにあたっての準備を的確にしているなということと、そのための我々がやる避難訓練ではなくて、避難所開設訓練をしているというようなこと、そういうふだんの避難所の開設にあたっての具体的な準備がなされているというところは、やはりこれから我々が市に提言する場合にすごく役に立つ部分なのかな。学校においては避難所のレイアウトがふだんからされている、ここら辺はまだまだ福島市としても足りない部分ではあったかなと思います。また、お金があればタブレットの活用をして、本当に便利な避難所というのが、そういうのができるのかななんて思っております。

そのほかご意見ありますか。

（後藤善次委員）すみません、１点付け加えていいですか。

文京区で妊産婦、乳児救護所、チラシも頂いていましたけれども、妊産婦の数が福島市と文京区ではちょっと桁が違うのかもしれないのですけれども､安心して避難できる避難所というテーマの中に、こういう方たちも一回避難所に行ってから２次福祉避難所に行くとかということではなくて、妊産婦の方が直接安心して避難できる場所の確保というのも一つこれはいいことなのかなってすごく思ったのです。

以上です。

（沢井和宏委員長）ありがとうございます。我々の視察の大きな目的の中に女性に配慮した避難所という観点がありましたので、その中で先ほど石山委員からもありました女性、特に妊産婦についての対応、初めからそういう設定で臨んでいるというのはやはりすばらしいのかなと思いました。

（村山国子委員）福島市でも妊婦とか障害者とか、そういう福祉避難所みたいなのをやっていると思います。やっていないかな。

（沢井和宏委員長）福祉避難所はやっています。

（半沢正典委員）福祉避難所にこれも入っているのかい、妊産婦も。

（沢井和宏委員長）妊産婦も入っているのかな。

（半沢正典委員）大きなくくりでは入れますものね。

（鈴木正実委員）妊産婦と同時に乳幼児も加えてください。子供たちがないわけにいかないので。

（後藤善次委員）ゼロ歳児は一緒だからね。

（鈴木正実委員）ゼロから３歳児とか、そういったところの避難所の在り方みたいなのもしっかり持っていなくてはならないのではないかな。

（後藤善次委員）学童避難所とか。

（沢井和宏委員長）ありがとうございました。

では、本日いただいた意見については、正副委員長手元で内容を整理させていただきまして、今後の委員会でお示しさせていただきたいと思っております。

それでは、以上で行政視察に対する意見開陳については終了いたします。

そのほか皆様から何かございますか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

（沢井和宏委員長）なければ、以上で本日の総務常任委員会を閉会いたします。

午後４時10分　　散　　会

総務常任委員長　　沢　井　　和　宏